キリスト教の変容⑦

天理大学国際学部教授
山田　政信　*Masanobu Yamada*

前号でブラジルのカトリック教会が抱くニューエイジ的なトレンドへの危惧について述べた。そのなかには、キリスト教以外の宗教思想運動で東洋思想の影響を受けたものを「ニューエイジ」と見做し、カルデシズムや日本の新宗教もニューエイジ的な疑似宗教運動に位置付ける傾向がある。日本の新宗教でいえば生長の家はブラジルで最も名が知れており、それだけに「ニューエイジ的な宗教」として危険視されるといえる。またそこにブラジルのキリスト教社会の変容を危ぶむカトリック教会の姿が露呈されている。

ここで、ニューエイジの特徴の概要をキリスト教と比較しながらまとめることにしよう（表参照）。キリスト教では、神は創造神として超越的な存在だと理解されるが、ニューエイジでは宇宙に遍在するエネルギー、超自然的な力、あるいは霊的な波長（霊波）だとみなされ、汎神論的性格を持つ【特徴①】。それは、霊性（スピリチュアリティ）を介して外なる大いなる宇宙と小宇宙としての人間が照応すると理解されるプラトン的な宇宙観だともいえる【特徴②】。このような宇宙観に基づいた神観を持つため人類の救済者とされるイエスの絶対的な力は相対化されることになる。

イエスは、コスミカルパワーの表明であったり、そのような力を悟った徳の高い指導者の一人として位置づけられる【特徴③】。つまり、イエスは仏陀やマホメットなどと等しい位置に並べられ、人間はそれらの存在領域に達することができるとされる。それは、人間には潜在的に内在している能力（神性）があると考えられているからである【特徴⑧】。もはや人間は限りなく神に近づき、あるいは神と一体化できる。それゆえ救済は、無限の能力を持つトータルなエネルギー（宇宙や神）と本来的自己が一体であると認識することによって生まれることになる【特徴④】。ゆえに救済の主導者であり救済を引き受けるのは人間自身である【特徴⑨】。

この論理を先鋭化させると自己以外の何者にも権威をおかないような個人主義になる【特徴⑩】。また、そのような個人主義は自己変容・自己変革を希求する思考を支える原理にもなる【特徴⑪】。救済は輪廻によって自己浄化される過程あるいは結果として生まれるという観念も強く【特徴⑤】、救済に至る方法として、瞑想、ピラミッドパワー、アロマセラピー、水晶など「東洋の神秘」を想起させる手段が用いられる【特徴⑥】。また、人間は神性を持っていると信じられているためキリスト教が説く原罪の観念を受け付けにくい【特徴⑧】。罪の子としての人間は否定され、神の子として人間は神の愛に抱かれることが強調される。これに参与する人びとは、概ね個人主義的で個別主義的なエートスをもっていることから、この運動は固定的な教義、教団組織、権威的な指導体系を持ちにくく、また個人の自発的な探求や実践を重んじるため「ゆるやかな共同性」を形成しやすい【特徴⑫】。それゆえ実践者は、集団あるいは組織を自己のために「利用」するという傾向が強い【特徴⑬】。

以上の点は、概ね先行研究において指摘されてきた、神観、救済観及び人間観に関するニューエイジの特徴である。筆者は、さらに「今・ここ」の救済への思考をあげておきたい【特徴⑦】。完全なる自己という自己イメージ【特徴④、⑨】を認識することで得られる救済の次元は、極めて現在志向的になる可能性があるからだ。

このような新しい精神・霊性運動が出現した背景には、狭義にはバチカン公会議以降、積極的に進められるようになったカトリック教会の宗教間対話による宗教的リベラリズムの出現、また広義には地球規模で起こっている文化変動、すなわち資本主義のさらなる進展による共同体の解体とその過程に見いだされる個人主義・個別主義の強調、あるいは近代的価値観の浸透の結果引き起こされることになった、西洋近代が形成してきた価値観の相対化ということが問題の底辺に存在していると思われる。

レオナルド・ボフらが霊性の復権が近代合理性の危機への応答だと語っているように、換言すれば現代は我々の社会を形成してきた西洋文化のヘゲモニーが弱体化する一方で、文化的・経済的なグローバリゼーションによって文化の相対化と、従来の西洋文化への自己反省が求められている時代である。「ニューエイジ」という用語自体は、上にみてきたように占星術の用語だが、この運動が目指しているものは近代文明そのものの相対化である。それゆえ、ニューエイジの思想を実践することが伝統的な近代科学や西洋文明を越えて、新しい人類の文明に参与すると信じられることがある【特徴⑭】。

最後に、ニューエイジの個人主義について再度触れておきたい。先に述べたように、ニューエイジは「本来の自分」または「ほんとうの私」を求める精神・霊性運動という側面を持っている。それは自分自身に権威を求める個人主義になりやすい。その一方で、人間の本性に完全性を認めるという平等主義を持っている。そこで人間が自己の完全性という本質を開化させるには、身体的、制度的、あるいは宗教的制限からの解放が必要となる。それによって個人は「彼自身」を表現できるようになるからである。極論すれば宗教からも「自由であること」が自身の救済を導くという考えに繋がる。アウメイダ神父が最も危惧するのは、このようなニューエイジの教団離脱的な思考にあると言うこともできる。

ブラジルにおけるキリスト教の変容と日本の新宗教の受容にはこうした現代世界を取り巻く文化や思想のうねりがあることも忘れてはならない。

ニューエイジの特徴

項　目	特　　徴
神観・宇宙観	①神は宇宙に遍在するエネルギー
	②大いなる宇宙と人間は照応する
イエス観	③イエスは徳高き人間
救済観	④本来的完全なる自己への目覚め
	⑤輪廻転生による自己浄化
	⑥「東洋的」な手段による救済
	⑦「今・ここ」という救済次元
人間観	⑧人間には神性があり原罪はない
	⑨人間が救済を主導する
	⑩自己に権威をおく個人主義
	⑪自己変容への志向
集団の特質	⑫ゆるやかな共同性
	⑬自己の利益のために「利用」される
その他	⑭西洋文明超克への志向

参考文献

葛西賢太「「精神世界」を支持する〈ゆるやかな共同性〉」『宗教と社会』第４号、129～152頁、1998
小池靖「ポジティブ・シンキングからニューエイジまで」『宗教と社会』第４号、49-77頁、1998
島薗進『精神世界のゆくえ　現代世界と新霊性運動』東京堂出版、1996年
Almeida, João Carlos. *Nova era e fé cristã*, Loyola, 1997